

こぼうし

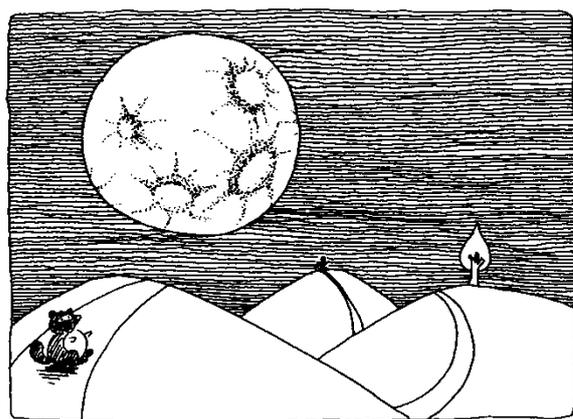
# ちえの小法師

一

みかわ おがきえ

むかし三河に小垣江という、海ぞいの小村がありました。家数二十けんもな  
いくらいの、びんぼうな村でした。

この村と、となり村とのさかいに、げんげ山と言って、春先になるとげんげ  
がまつ赤にさく小山がありました。その山のすその、笹寺ささでらという村のだんな寺  
に、へちまのお化けばのように長細い顔をした和尚おしょうさんが、法蓮ほうれんという小僧こぞうと二



う。げんげ…れんげそ

人でくらししていました。

おしよう

ある夏の日、和尚さんは、村のだん家の法事に出かけることになりました。

か ほうじ

ところが、うらのげんげ山に年をとった大だぬきがいて、昼でも出て来て人を

ば

ほうれん

化かすことがあるので、法蓮一人をのこしておくのが、少し気がかりでした。

おしよう

和尚さんは出がけに、法蓮ほうれんに向かむって、

ば

「わしのるすに山のためきが化けて来たら、大ごえで、たぬきめを食ったらう

まかったと、どなってやれよ。そうすれば、びっくりして、にげて行ってしま

うからな。あの大だぬきが人間に化けると、きまってるねこぜになっているから、

すぐ分かるよ。」と言いきかせておきました。

おしよう

和尚さんが出かけた後で、法蓮は、竹ぼうきでうら庭にわをはいていますと、間

だん家…寺とつな  
がりがあり、寺を  
ささえる家。

法事…死者をくよ  
うするのための行事。

もなくげんげ山の方から聞きなれないおばあさんの声で、

「げんげ山からお寺を見ればの、

お寺さびしや、小憎こぞう一人やの。」

と、こんなうたをうたうのが聞こえました。はてな、と思つて、ふり向むいて見ますと、山の下のところ、しらが頭の、小さなおばあさんが、つえにすがつて立つて、こつちを見えています。おばあさんは、

「お小僧こぞうさん、ごせいが出るね。」と、なれなれしく声をかけながらのこのこと法蓮ほうれんのそばへ来ました。法蓮ほうれんが気をつけて見ますと、ひどいねこぜのばあさんなので、

「ははあ、来たな。」と、かんづきました。おばあさんは、

---

「お小僧さん、あたしがはいてあげようよ。そのほうきをおかし。」と言います。こぞう ほうれん 法蓮は、いきなり大ごえで、

「たぬきめを食ったらうまかった。」と、どなりました。すると、おばあさんは、きやつとさけぶなり、大だぬきのすがたになって、一さんに山へにげ上がつてしまいました。ほうれん 法蓮はおかしくておかしくて、はっはとわらいこけました。

夕方、和尚さんは、にんじんと、こんにやくのお煮しめをおみやげにもらつて、帰って来ました。おしょう ほうれん 法蓮はさつそくたぬきのことを話しました。すると、和尚

さんは、

「法蓮や、おまえはこれからは、よほど気をつけなくっちゃいけないよ。あのたぬきはしゅうねん深いやつだから、今日のことを根に持つて、きつと、お

まえにしかえしをしに来るよ。」と言いました。

二

法蓮ほうれんにからかわれた大だぬきは、くやしくってたまらないので、どうかしてはらいせをしてやりたいと思つて、ねらっていました。四、五日たったある日ぐれ方に、たぬきはこっそり下りて来て、お寺のうらへ回つて、しようじの中の話し声に耳をすましました。と、和尚おしょうさんが、

「法蓮ほうれんや、ごくろうだが、いそいでとうふを一丁ちよう買って来ておくれな。」と言いつけています。

たぬきはしめたと、にこにこして、大急いそぎで先回りをして、村のとうふ屋やへ出かけました。

とうふ屋やの表おもてでは、あたりの子どもたちが大ぜいで、

「からす来い、こうもり来い。」

屋根やねの上で、とうふ食たわしよ。」

と、うたいうたいあそんでいました。

そこへ、年をとったねこぜのおさむらいが、

「ゆるせよ。」と言って、とうふ屋やへ入いって来きました。おさむらいはていしゆゆに向むかって、

「その方の店にあるとうふを、おれがのこらず買かってつかわそう。」と言いいます。

ていしゆは大よろこびで、

---

「はいはいありがとうございます。しかし、おぶけさま、こんなにどっさりのとうふを、どうなさいますのです。」とたずねました。すると、さむらいは、「じつは、ちとわけがあつて、そのとうふをのこらず屋根へなげ上げて、からすや、こうもりに食わそうと思うのじゃ。代は<sup>だい</sup>はらつてつかわす。たいぎながら、さつそく取り<sup>と</sup>かかつてくれい。」と言います。

おかしなおさむらいだとは思いますが、べつにそんなになる話でもないので、ていしゆは、おかみさんと二人がかりで、ありったけのとうふを、のこらず屋根<sup>やね</sup>へなげ上げました。するとじきにからずがパタパタとんで来て、とうふをつつについて食べはじめました。さむらいは、ふんふんこれでよしというふうに、うなずきながら、ふところから小ばんを一まい取り<sup>と</sup>出して、

「おいていしゅ、いろいろと世話せわになったの。つりはいらんぞ。」

と、小ばんをていしゅの手にわたして、さっさと帰って行きました。

二人が大よろこびでほくほくしているところへ、笹寺ささでらの法蓮ほうれんがおかもちを下げて、とうふを買いに来ました。ていしゅは手をふって、

「法蓮ほうれんさんせつかくだが、とうふはもうすっかり売り切れだよ。じつは、これこれだね。」とわけを話して、とくいそうに小ばんを出して見せました。

ところが法蓮ほうれんが見ると、その小ばんというのが柿かきの葉はっぱです。法蓮ほうれんは、

「あっはっは、山のたぬきにだまされたんだ。しっかりしなさいよ。」と言うなり、おかもちのふたで、二人のせなかを、いやというほどぶんなぐりました。

そのはずみに二人はやっと正気しょうきがついて、小ばんが柿かきの葉はに見えてきました。

おかみさんはくやしがつて、おんおんなき出しました。

ほうれん

法蓮は、お寺へ帰つて、和尚おしょうさんに今のことを話しました。そして、これか

らげんげ山をこして、となり村のとうふ屋やへ行つて買つて来ましようと言いま

おしょう

した。和尚おしょうさんは、

ほうれん

「じようだんじゃないよ、法蓮ほうれん。おまえ一人でげんげ山を通れば、たぬきがど

んないたずらをしかけるかしれやしないよ。たぬきは、おまえを山へおびきよ

せようと思つて、あんなことをしたのにちがいない。およしおよし。」と、止

ほうれん

めました。しかし法蓮ほうれんは、

ば

「なあにたぬきなんかに化ばかされてたまるものですか。」と、平気へいきな顔で、ち

ほうれん

ようちんと、おかもちを持つて出ていきました。法蓮ほうれんはげんげ山へかかると、

大声で

「寺のまどから、げんげ山見ればの、

たぬきが小えだに、赤いべべほしたやの。」

と、うたいうたい、行きました。たぬきが出て来たら、またどなりつけてやろうと思ひながら、通りましたが、とうとう何ごともなく、となり村のとうふ屋やへ着つきました。もう日もとつぷりくれたので、とうふを買うと、ちようちんをつけて外へ出ました。すると、

「もしもし法蓮ほうれんさん。」と、後ろからよびかける者ものがあります。ふり返かえつて見ると、それは小垣江村で一ばんおくびよう者ものの、呆助ほうすけというわか者ものでした。

呆助ほうすけは、今朝けさ早く山をこして、遠い町までわたを買いに行つたのですが、帰

りがけにここまで来ると、日がくれてしまつて、とても一人ではこわくつて、げんげ山が通れませんか。それで、だれか村へ帰る人が来ないものかと思つて、待つていたのだと話しました。

二人は一しよに、げんげ山へかかりました。やがて下り道になりかけますと、ふと、わかい女が一人道ばたの切かぶにこしをかけて、さもつかれたように休んでいます。色の白い、きれいな女ですが、よく見るとねこぜです。

「うつつ。」と、ほうれん法蓮はもう少しでふき出すところでした。二人がそばを通りすぎようとしていますと、女はにっこりわらつて立ち上がつて、

「もしもし、おねがいですから、あたしも一しよにつれてつて下さいな。ちようちんもなしでこの山を下るのがこわくて、どなたかいらつしやるのを待つて

いたところですよ。」と言います。呆助はたぬきが化けたのだとは知らないものですから、

「ほう、それはそれは。じゃあ一しよに行きましょう。」と言いました。法蓮は、これはおもしろいぞ、たぬきめ何をし出すか見てやれと思いつつ、すつかりばかされているようなふりをして、一しよに歩きました。しばらく行きますと、女は法蓮に向かつて、

「そのおかもちを、あたしが持つて上げましょう。」と言います。法蓮は頭をふつてわたしませんでした。すると女は呆助に、

「そのつつみを持つてあげますから、こちらへおかしなさい。」と言いました。呆助はよろこんで、わたのつつみを女にわたしました。

しばらくすると、道ばたにきれいな草地がありました。女は、

「おお、きれいな草っぱだこと。こんなところをすあしで歩くのは、とてもいい気持ちのものですよ。」と言ってげたをぬいではあしになりました。と思うと立ち止まって、

「ここで少し休んでいきましようよ。」と言って、しばふの上にこしを下ろしました。二人も、そこへ足を投げ出して休みました。女は、

「蚊が多いから、蚊やりをたきましようね。」と言って、どこからか、かれえだを集めて来て、ほうすけ 呆助から火打ち石をかりて火をつけました。

ところが、おかしなことには、そのかれえだがちつとも、もえる音をたてないばかりか、みようにきなくさいにおいがします。ほうすけ 呆助は、そんなことにはて

---

んで気がつかないらしく、しきりに女とおしゃべりをしています。法蓮は、蚊かうやりのことが気になってなりません。たぬきめ、何かいたずらをしたな。ここいらで化けばの皮かわをはいでやれと思つて、そつとおかもちのふたを取とるなり、女のせなかをごつんと、力まかせに打うちのめしました。女はキヤツとさけんで、大だぬきのすがたになつて、にげて行つてしまいました。

その後で見ると、どうでしょう。蚊かやりにもしていたかれえだと思つたのは、呆助ほうすけが女に持もたせたわたのつつみでした。呆助ほうすけはおいおいなき出しました。

法蓮ほうれんは呆助ほうすけをなだめなだめ山を下りて、お寺へ帰りました。法蓮ほうれんの話おしやうを聞いた和尚ほうれんさんは、

「法蓮ほうれんや、おまえは、うっかりしてはいられないぞ。たぬきのやつは、きつと

かたちをうちにやって来るよ。」  
と言いました。

三

その後のある日、和尚おしょうさんはげんげ山をこえて、遠い町まで用足しに行きました。和尚おしょうさんは出がけに法蓮ほうれんに向かつて、

「わしのるすにきつとたぬきがやって来るぞ。用心せいよ。」と言いました。  
法蓮ほうれんが、庭のそうじをすませて、部屋へやの中にいますと、だれかがトントン戸をたたきます。

「だれだ。」とどなりますと、和尚おしょうさんの声で、  
「法蓮や、わしだよ。今帰って来た。早く開けてくれ。」と言います。たった

---

今出かけたばかりの和尚おしょうさんが、こんなにすぐ帰って来るわけがありません。

「ははあ、あいつだな。」と、法蓮ほうれんは思いました。ようし、今度こそは、こつ

ぴどい目にあわせて、二度どと下りて来られないようにしてやろう、と思つて戸を開けますと、ねこぜの和尚おしょうさんが、

「やれやれ、くたびれた。」と言いいい、入つて来ました。法蓮ほうれんは、

「和尚おしょうさん、おつかれになつたでしょう。これからすぐにおふろをわかしまし  
よう。あなたは何よりもおふろがおすきですからね。」と言いながら、大急いそぎ  
でふろおけへ水をくみ入れて、どんどん火をたいて、あついあついにえ湯ゆをた  
ぎらせました。

「和尚おしょうさん、ちようどいいかげんにわきました。すぐ、お入りになつて下さい。」

と言いますと、たぬきの和尚は、

「ほう、これは、ごくろうだった。だが法蓮ほうれんや、今日はわしのせなながかを流して  
くれるにはおよばないよ。さつと入って、すぐ上がるからな。」と言って、湯ゆど

の方へ行きかけます。法蓮ほうれんは

「和尚おしょうさん、今日にかぎって、あのことを、おわすれになったのですか、あな  
たはいつも湯ゆにお入りになるときは、まず湯ゆどのの屋根やねへお上りになって

「うらのお山の、げんげの花が、

さいたか、さかぬかからすにきこうの。」

と、おうたいになって、湯気ゆげ出しのあなから湯船ゆの中へ、さかさまにおとび  
こみになるじゃありませんか。」と言いました。たぬきの和尚おしょうは、

---

「そうそう、すっかりわすれていたよ。」と言いながら、はしごをかけて屋根へ上がって、うらのお山のげんげの花が、と、うたうなり、湯気出しのあなから、湯おけの中へ、ばちやんとまっさかさまにとびこみました。ところが、にえたぎったあついあつい湯ですからたまりません。たぬきは、全身に大やけどをして、キヤンキヤン鳴きながらはい上がって、片足を引き引きにげて行きました。それからというものは、たぬきはすっかりこりて、もうけっして村へ下りては来ませんでした。法蓮が毎朝早く起きて、しょうろうへ上ってかねをつくとき、げんげ山の方から、悲しそうな声で、

「山の上から笹寺見ればの、

小憎こわやの、かね鳴らすの。」

と、たぬきがうたいうたいするのが聞こえました。

